

毎日歌壇

水原 紫苑 選

明け方の形象として魔術師がしんと取り出す
テールナイフ 大阪 中村 杏

△評▽ナイフの銀のかがやきの中に朝の食
卓が広がる。いったい誰がテールにつく
のだろうか。

オレンジの組織の損傷激しくて果汁はオレン
ジの断末魔 甲府市 村田 一広

△評▽私たちはオレンジの死の苦しみを味
わっているのか。許してほしい。

静謐に痛みはあるか うつくしく埃をかぶ
る人形の肩 加古川市 石村 まい

はつゆきは予定調和を拒絶してどこにも帰れ
ぬ八月の雪 町田市 古井 朔

ぬばたまの夜の水面の十六夜は片恋のことた
だ眺むるを 高島市 くらたか湖春

憔悴の彫りの深さにつまずいて、蹴けは湧
きあがる土の香 川崎市 二宮 珊瑚

窓際のひかりが髪に乗っている 間も無くバ
スは病院に着く 盛岡市 立花 塵

恐竜が減んだゆえにヒトがいる小惑星の小さ
な悪戯 倉敷市 中路 修平

館内に「大回顧展」の字はありて絵はさんざ
んとひしめきあへり 東京 岩本 遥

押しよせる夜の闇にと吞まれゆく濡れたレ
ルのにぶき銀色 掛川市 村松 建彦

伊藤 一彦 選

「明けましておめでとう」とは鳴かぬとも希望に
あふれりリビタキ歌う 神戸市 前田 達生

△評▽鳥の鳴き声は聞く人の心で導く。ル
リビタキの声は確かに美しいが、作者が希
望にあふれた正月を迎えたことが伝わる。

曲名がグループ名かわからんと夫と言ひ合ひ
紅白を見る 三条市 甘 辛

△評▽第四句の「言ひ合ひ」の語が場面を
よく伝える。50代の作者である。

年末になると会ってた人がいることを思い出
している年末 堺市 一條 智美

受付であらおろおろ見つからず もともと
持参していなかった 河内長野市 寺田 愛子

冬晴れの日のひめやかな愉しみは鉢をかへし
て見る団子虫 武蔵野市 谷口 菜月

なめらかに車両は線路の切り替えてうねって
私たちもうねって 東京 奥山いずみ

連なった自転車ベルの音 冬の澄んだ空気
を順に揺らして 東京 遠野 鈴

人肌を与へられずに腕時計遅れてゆきぬ机の
中で 仙台市 三本松 拓

初霜の報を境に蝶を見ず足るほど生きしか
枯生騒げり 瑞穂市 渡部 芳郎

名を呼べばチラと振り向くランナーの後ろ姿
に気力みなぎる 延岡市 河野 正

米川千嘉子 選

ぼろぼろのぬいぐるみにはなりきれず生き抜
くためのことばを紡ぐ 町田市 郁羽 凪

△評▽「ぼろぼろのぬいぐるみ」とは誰か
に愛玩される徹底的に受け身の存在だろう
か。そうならないための言葉を。

人間のひとつの顔に絆されて信頼するもひと
つの生き方 掛川市 宮川 正夫

△評▽人には多くの顔があると冷めるので
はなく、自分に向いた顔をまず信じる。

冬の夜の終はりに白く浮かびくる野生インコ
の糞かわきたり 東京 浅倉 修

バスタからひとり引き返す改札で薄氷の張り
はじめる瞳 東京 遠野 鈴

言の葉が心に沿うか吟味する沈黙のなか藤井
聡太は 春日部市 宮代 康志

ぼんぼこと煉瓦の道を走りゆく空気充たして
貰いしタイヤ 大阪市 森川 慶子

救急の夜勤を終えて元日の次男一家のにぎに
ざしく来る 河内長野市 寺田 愛子

脇役も高齢となり消えてゆく何回も見る「男
はつらいよ」 日南市 宮田 隆雄

妻逝きて人の気配の消えし家猫と互いの居場
所を探る 大分市 赤峰 宏史

父たちは酒臭かりきかたはらに厭あがる子の
ある睦月かな 高知市 矢田 敦之

加藤 治郎 選

恋すれば人は変われるほくたって君と出会う
てピーマン好きに 川越市 石田浩二郎

△評▽ポップな作品である。第二芸術論で
たたかれた湿っぽい嘆きから短歌は遠くま
で来たのである。ピーマンがユーモラスだ。

首すじが寒そうだと触れてくるその手のた
めに寒い首すじ 枚方市 坊 真由美

△評▽偽の善意を拒む心情のメタファーに
なっている。首すじの身体感覚がよい。

飴色になるほど泣いた失恋を調理してくれる
人いませんか 岐阜市 山上 秋恵

五分後に雪が降りますとAIがセックスして
るほくらに告げる 東京 嶋村 純

人間から解き放たれてお風呂場であなは小
鳥みたいに歌う 柏市 望月万里葉

南国の雨に生まれてまっ先にバナナの背中を
すべり落つたい 津市 川原田明子

誰がためにレゴはあるのか説明書・部品並べ
て父を待つ子ら 神戸市 浅田 拓史

若い頃のようにパッションのある詩が書けなくて君の
ボエジーに追いつけないよ 直方市 大石 聡美

オッチャンと呼べば答える我が夫はスーパ
ー探して自転車で駆ける 沼津市 麻場 育子

くちびるは今日もかわらずふるえまです濁いて
いない喉を通る水 八尾市 瀬戸口祐子

投稿規定

はがき1枚に
選者を指定し、
未発表の自作を

2首・2句まで。住所、氏名、年齢、
職業、電話番号を明記し、宛先は
〒100-8051(住所不要) 毎日新聞
学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句

は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選
者名) 係へ。毎日新聞デジタルの投
稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けて
います。

他媒体との二重投稿や、同一作品
を複数の選者に投稿するのは厳禁で

す。投稿は趣旨を変えずに添削する
ことがあります。

入選作は毎日新聞社の電子メディ
アやデータベース、アプリ「俳句て
ふてふ」で公開し、本社が作成また
は許諾した出版物やメディアに掲載
することがあります。